

2021PC カンファレンス分科会発表論文要旨

8月22日(日) 13:00-15:00

テーマ：プログラミング教育(1) (司会：鳥居 隆司 梶山女学園大学)

■2-A-1

初心者向けプログラミング教育 - 3DCG プログラミングのゼミナールにおける実践例 -
山住 富也

名古屋経済大学

プログラミング教育が盛んに行われるようになった。その導入にはさまざまな方法がとられている。ビジュアルプログラミングのようなブロックを組み合わせるものから、C言語、Python といった一般のコーディングから入る場合もある。本研究においては、3次元のグラフィックスをコーディングによって出力する言語を、プログラミング初心者向けに利用した場合の効果を検討する。言語は「POV-Ray」というフリーウェアで、文法事項を解説した教材を与えて反転授業を行った。グラフィックスの出力という実行結果を得られる言語と、他の言語のコーディングの学習とを比較する。

キーワード：3DCG／プログラミング

■2-A-2

電子教科書「ためしながら学ぶC言語」を活用したC言語プログラミング入門教育の実践
土肥 紳一

東京電機大学

「ためしながら学ぶC言語」は、初版と第二版をプリント本として出版し、計2年間利用した。この内容については、過去のPCカンファレンスで述べた。その後、改訂を繰り返し、この度、書籍化を実現した。紙での出版が授業開始に間に合わないことが判明し、電子教科書を先に出版し、少し遅れて紙での出版を行った。遠隔講義の中、さらに電子教科書を始めて採用し、想定外の問題も見えてきた。本論文では、電子教科書を活用した授業での実践について述べる。

キーワード：電子教科書／C言語／プログラミング入門教育

■2-A-3

Juliaによるプログラミング教育について

箕原 辰夫

千葉商科大学政策情報学部

Pythonをプログラミング教育のプログラミング言語として使用することを2009年のPCカンファレンスで提唱して以来、やっと様々な大学で標準のプログラミング言語として、プログラミング教育で使われるようになってきました。2014年の段階で米国のコンピュータ

科学学科でのプログラミングの基礎を導入言語として Python がほぼ 100%使われていたため、やっと日本の大学も追いついてきた感が否めません。Python の次のプログラミング教育のための導入言語として、いち早く Julia を使うことを提唱したいと思います。設計自体が Python の後継で、C 言語のような高速実行性も目指していますので、今後、普及する可能性があります。ゼミナールの学生に、今年度から Julia を用いてプログラミング教育を始めました。Python と比較しながら、Julia でのプログラミング教育の可能性について考えます。

キーワード：Julia／Python／プログラミング言語

■2-A-4

マインドストーム EV3 を活用した Python の入門的学習

鈴木 治郎

信州大学全学教育機構

ロボットキット EV3 上で簡易 MQTT サーバや HTTP サーバを動かして、PC やスマホ、他の EV3 との通信プログラムを学習する事例紹介を行う。また受講学生が自宅待機状態でインターネット利用のオンデマンド型学習を行う中、学生たちが学習課題を動画提出するなどオンライン学習での工夫も紹介する。

キーワード：STEM 教育／プログラミング教育／オンライン学習

テーマ：GIGA スクール構想（司会：高瀬 敏樹 市立札幌旭丘高等学校）

■2-B-1

ICT 活用実践事例集「まなびの旅」冊子制作および分析について

平田 義隆

京都女子中学校高等学校

2020 年度、学校ではコロナ禍による休校もあり、生徒の学びを止めないためにできる限りのことを行ってきた。その後、第 2 波等も考慮し、生徒一人 1 台端末の所持(いわゆる GIGA スクール構想)の実現が全国的に急速に進んだ。筆者の勤務校では、数年前から教員は一人 1 台の貸与 PC を所持し、様々な教育活動に活用しているところであるが、2021 年度より中学校で生徒一人 1 台端末の配付が始まり、教員はその教育活動への利用について試行錯誤しているところである。そこで本校では、筆者がこれまでの ICT 活用実践を冊子にまとめ編集することになった。各教員の実践を見える化し、それを共有することによって、今後の新しい教育への参考にしようという狙いである。ここではその冊子制作の過程で見えたこと、生徒の変容や教員の手応え等から明らかになったことを通して現状の分析を行い、今後の教育活動への課題を考えていきたい。

キーワード：ICT 教育

■2-B-2

小学校プログラミング教育を推進するための教員研修の在り方についての検討

慶徳 大介

3rdschool

筆者は、平成 30 年度から平成 31 年度まで、東京都教育委員会が設置した「地域教育推進ネットワーク 東京都協議会」のもと、「企業・団体や地域との連携によるプログラミング教育推進」の立場から、A 市におけるプログラミング教育推進のため後方支援を行ってきた。

『小学校プログラミング教育の手引』（文部科学省，2020）の「プログラミングに関する学習活動の分類と指導の考え方」における A~D 分類に関して、授業等の連携を行ってきたが、その中でプログラミング教育の指導に不安を抱える教員が多いことが課題として見えてきた。そこで本研究では、教員経験や年齢に関係なく、プログラミング教育を推進していくための教員研修の在り方について検討していく。

キーワード：教員研修／プログラミング教育／ICT 活用指導力

■2-B-3

GIGA スクール構想に向けた本校 ICT 環境整備のまとめ

八島 博充

北星学園大学附属高等学校

文部科学省より打ち出されている「GIGA スクール構想」の実現に向けた ICT 環境整備の方針に沿って各校 LAN 環境等の整備、1 人 1 台端末の整備等が進められている。本校においても、まだ現在のような構想が提言される以前から独自に情報環境整備に取り組んできており、サーバのクラウド化や校内ネットワークの強化、生徒端末の整備など、現在の構想に対応した環境へスムーズに接続させることができた。ここに、北星学園大学附属高校これまで行ってきた ICT 環境整備の取り組みについて報告したい。

キーワード：GIGA スクール構想／ICT 活用教育／クラウド化

■2-B-4

GIGA スクール構想の実現は残業代 0 で長時間労働を余儀なくさせられ支えられている

井川 大介

北海道北見市立北小学校

国の GIGA スクール構想により学校設置者は、端末と充電保管庫や回線の増強などの教育条件整備を完了させた。教育機会確保法の理念をイメージする保護者は、COVID-19 の影響による学校の臨時休業や不登校や病弱児童への対応においても、ICT の活用により学習保障が可能な政策であると評価していた。しかし、多くの公立学校では、ID とパスワードの管理と初期設定、各教室での授業時間中の不具合解消を担うための ICT 支援員が常駐さ

れることは無かった。さらに生徒指導における ICT 関連の問題行動への対応や、端末の稼働率を上げるために、過酷な労働環境で過労死ラインをすでに超えている教師の働き方に変化が生じることになった。特に ICT 活用のための操作等における技能の習得や習熟に関する労働負荷が増大し、教師は残業代なしで長時間労働をさらに余儀なくさせられることになったのでこの労働環境とその実態を報告する。

キーワード：労働環境／公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法／教育条件整備

テーマ：学習メソッド (司会：松下 慶太 関西大学)

■2-C-1

ソーシャルリスニングにおける問題発見の方法

白土 由佳

文教大学 情報学部

社会学系の研究において、どのようにテーマを見つけ問いを立てるかという問題は重要である。本研究では、社会学系の研究の中でも、特にソーシャルリスニングを活用した研究においてどのように問題発見が可能か、その方法について検討する。ソーシャルリスニングを活用した研究では、「ソーシャルメディアをデータとして捉える」「データをざっと眺める」という取り組みが問題発見を促すことが筆者の経験に基づく仮説である。本研究では、上記の仮説に基づき、大学4年生の卒業研究を対象として、ソーシャルリスニングにおける問題発見の方法について検討する。

キーワード：ソーシャルリスニング／ソーシャルメディア／問題発見

■2-C-2

PPDAC サイクルによる EBPM の徹底：情報マネジメント学部複数科目における実践

小野田 哲弥

産業能率大学 情報マネジメント学部

PPDAC サイクルとは Problem(問題)→Plan(計画)→Data(データ)→Analysis(分析)→Conclusion(結論)で構成される統計的問題解決フレームワークであり、EBPM (Evidence-Based Policy Making)とは「証拠に基づく政策立案」と邦訳される公共政策学の用語である。筆者は情報マネジメント学部において、キャリアデザイン科目である『キャリア設計と自己開発／業界研究』、コース専門科目である『Web マーケティング』、そしてビジネスコンテストへの挑戦・就職活動・卒業論文などを総合的に指導する『実践ゼミ』を担当している。PPDAC の Data に定性データを含め、EBPM の Policy を行政政策のみならずビジネス戦略やキャリアプランに拡大解釈することによって、まさに本学部が目指すべきカリキュラムのコンセプトとして体系化できると考え、実践事例とともに紹介する。

キーワード：PPDAC サイクル／EBPM／情報マネジメント

■2-C-3

オンライン情報基礎学習コースの受講と「学びのスタイル」

篠田 有史

甲南大学共通教育センター

学習者の学びの個性に対応する方策として、学習スタイルを考察するという枠組みが古くから研究されている。筆者らは、オリジナルの学習スタイル調査手法である「学びのスタイル」アンケートに関する研究開発を行ってきた。ここでは、事前調査の「学びのスタイル」と、事後の授業に関するレスポンスの間の関係性を検討してきたものの、得られた結果を授業改善に役立てる形には結実できていない。そこで、本研究では、学習者に提示する教材の手がかりとするべく、オンデマンド式の基本部分に加え、任意参加のリアルタイム式授業を追加実施するオンライン情報基礎学習コースを構築し、授業の中で学習者を調査する。事前調査として「学びのスタイル」アンケートを実施し、事後調査として授業感想だけでなく、リアルタイム式授業への参加状況についても調査することで、事前に確認した「学びのスタイル」が受講動向に反映されるか検討する。

キーワード：学習スタイル／学習者分析／情報基礎教育

■2-C-4

手書きノートからの思考特性判定

吉田 賢史

早稲田大学高等学院

本研究の目的は、学習者自身のノートテイキングが理解に繋がっているか否かを判定するシステムの構築である。学校教育はリテラシー文化が中心でオラリティ文化が軽視されがちである。しかしながら、タブレット世代の学習者は必ずしも学校のリテラシー文化に馴染む者ばかりではない。授業のノートテイキングにおいて、学習者は、評価のために評価者にあつた書き残しが必要であると考えられるケースが少なくない。そのため、教員が高評価を与えたノートを真似しようとし、板書をできるだけ忠実にノートに再現しようとする。ところが、そのように残されたノートは、学習者の学習内容を理解し記録するノートではなく、評価者のためのノートである。そこで、本研究では、タッチと動画の文化の中で育った学習者の思考特性にフォーカスし、自身にあつたノートテイキングがおこなえているか否かの判定を試みる。

キーワード：ノートテイキング／思考特性／音声と文字

テーマ：オンライン教育 (1) (司会：落合 純 新潟経営大学)

■2-D-1

アンケートフォームを使ったオンラインテストの応用的活用の可能性

小川 健

専修大学・経済学部 (生田校舎)

大手IT系を中心にアンケートフォームを利用したオンラインテストが法人契約に加え個人アカウントでも可能になったことを受け、大学で契約しているLMS以外にフォームベースのオンラインテストの活用可能性が広がってきた。とはいえ法人契約を活用する意義もある。フォームではメールアドレスの収集により事前の解答設定が不要で、後から点数・結果・自動解説などを設定・変更して電子メール通知可能であり、大学内部のLMSが混雑等で使えない場合にも使える(混雑が避け易い)利点がある。本報告ではGoogle系とMicrosoft系の各フォームを基にしたオンラインテストの抱える特徴の違いによる棲み分けだけでなく、問題群のランダム化等通常機能に無い部分の対処法、計算問題等を含むオンラインテストにおける繰り返し同じ問題を解かせる必要がある場合の対処法、Googleフォームに付加するタイマーアドオンの使い分けなどを取り上げる。

キーワード：Googleフォーム/Microsoft Forms/問題群のランダム化

■2-D-2

簡便に利用可能なCBTシステムのための問題作成・管理機能

松浦 敏雄

大阪市立大学

コンピュータを利用した試験(CBT: Computer Based Testing)を実施するには、問題の登録、受験者の登録、答案の回収、採点、および、成績の通知など、全てにおいて適切な情報管理が必要であり、情報漏洩や外部からの妨害を防いで安全にCBTを実施するのは容易ではない。本研究では、複数人での問題作成、および、作成した問題の管理機能について詳述する。

キーワード：CBT/クラウド/問題作成

■2-D-3

反転学習むけ事前学習教材としてのバーチャル空間の活用

矢野 浩二郎

大阪工業大学情報科学部

反転学習とは、従来型の受動的な講義中心の対面授業ではなく、受講者の能動的な学習を可能にするため、教授内容を事前に授業外で学習できるようにすることである。それゆえ、反転学習の授業デザインでは、対面授業における学習活動が議論されることが多いが、事前学習については動画やスライド資料を用いた、受動的な学習活動になりがちである。そこで本研究では、バーチャル空間(VS: Virtual Space)を教材として用いた、より能動的な事前学習の

方法について検討した。VS はウェブ上に作られた 3DCG 空間であり、ビデオ、画像、3DCG モデルなど様々なメディアをブラウザや VR ヘッドセットで体験することが可能である。本報告では、VS 制作ツールとしての Mozilla Hubs の活用、それを用いた事前学習教材の制作方法、授業事例、受講生からの反応などについて記述し、反転学習における VS の可能性と問題点について議論する。

キーワード：バーチャルリアリティ／反転学習／アクティブラーニング

テーマ：語学教育の革新（司会：近藤 雪絵 立命館大学）

■2-E-1

中国語で／をプログラミングを／で学ぶ授業

田邊 鉄

北海道大学 情報基盤センター

いわゆる「一般教養」科目の一環である外国語と情報は、大学生として学習・研究するためのスキルを学ぶ「初年次教育」の両輪と言える。ただ、この両者は寄って立つ学術的基盤が異なるため、内容には大きな隔たりがあり、連携させることによって特別な成果を得ようとする試みは、あまり見られない。CALL などの e-Learning は外国語教育にとっては一つの成功例であるが、教育全体に一般化できるものではなく、情報教育に資するものとは言えない。そこで、CLIL の考え方を採用することによって、「中国語を用いてプログラミングや統計処理について学ぶ授業を中級までの中国語学習者を対象に行う」実践・研究を構想した。目下のところ、演習授業の一部として実施している。今後、データを積み重ねて、効果について初歩的な検証を行う。

キーワード：中国語教育／情報スキル／CLIL

■2-E-2

フォニックスを学ぶためのタブレットアプリケーション

奥山 陽斗

三重大学工学研究科電気電子工学専攻

令和 2 年度より全面的に実施された新小学校学習指導要領等では小学校第 5・6 学年に「外国語科」が新設されアルファベットの文字の「名称の読み方」に加えて「文字が持っている音」（一般にはフォニックスと呼ぶ）を指導することとなった。著者らは三重大学の学内の教育学部と工学部の共同研究として小学校でフォニックスを学ぶためのタブレットアプリケーションの開発を行い三重熊野市の小学校において実践を行っている。本タブレットアプリケーションの特徴は、お手本の発音を聞いた後で児童がその発音をまねして発音したものを録音し自分で聞き比べることができること、また、発音のクイズにより聞き取りができるかどうかを児童が自分で確認できることにある。これにより、小学校の外国語活動の授

業において児童ひとりひとりにタブレット (iPad) を持たせ、先生の指導に従いながらであるが個別に学習を行うことができる。

キーワード：英語発音学習／フォニックス／タブレットアプリケーション

■2-E-3

英語発音学習システムの教員の児童へのフィードバックを支援する機能

北 英彦

三重大学工学研究科電気電子工学専攻

著者らは三重大学の工学部と教育学部との共同研究として小学校での英語発音学習を支援するタブレットアプリケーション「Let's Phonics」の開発を行い三重県熊野市の小学校において実践を行っている。このアプリケーションでは児童は自らの発音を録音して手本の発音と自身の発音を聞き比べることで発音を練習する、英語の発音に関するクイズを実施するといった発音学習を個々のペースで進めることができる。本発表では「Let's Phonics」を用いた学習において教員が児童へ適切なフィードバックができるように支援するシステムを提案する。具体的には、各児童の学習の進捗から達成度を把握する、各児童の蓄積した学習結果（録音した発音・クイズ成績）を表示し児童の苦手な発音の把握を補助する機能を提供する。

キーワード：英語発音学習／フィードバック支援／タブレットアプリケーション

■2-E-4

中国語力と社会人基礎力育成のための SDGs を素材にしたオリジナル教材の教育効果

山田 留里子

関東学院大学人間共生学部

ローカルな次元で繰り返される複雑で困難な状況が多種多様な形でグローバルに広がる中、社会が危機を乗り越えていくための道標として SDGs の重要性が注目されている。ゴールである 2030 年には現在の大学生が社会の中核となるが、自らが持続可能な実態を把握し解決方法を模索し、主体者となって実行に移していくことのできる資質・能力を育成することは、これからの社会のあり方をシステムチェンジする力となると考える。さて「日本の大学における初級中国語学習者は増加傾向ではあるが、次のステップへ進む学生は減少している」や「前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力などの代表される社会人基礎力の育成が難しい」等にみられる課題を解決するため、代表者は、SDGs を素材に中国語を学習しながら社会人基礎力の育成を目指した“『SDGs』を題材にした課題解決型中国語”を開発した。本発表では LMS 活用による教育効果について述べる。

キーワード：中国語学習／SDGs／LMS

テーマ：PC 講座（司会：角南 北斗 フリーランス・ウェブデザイナー）

■2-F-1

大学生を対象としたオンラインパソコン相談デスクの運用—複数大学同時展開の効用

川崎 祐介

株式会社 TRYWARP

TRYWARP は 2006 年より、大学生協とパソコンの苦手な大学新生を対象としたパソコン講座を実施してきた。そして新型コロナウイルス感染症蔓延に伴い、2020 年度よりその方式をオンライン講座へと転換した。それまで、その大学の先輩スタッフが後輩である受講生からの質問に丁寧に答えることが講座の大きな価値であったことから、オンラインでもきめ細かく対応するため、公式 LINE を用いたチャットサポートの運用を始めた。その結果、講座に関する質問に加え、大学の講義で用いるビデオ会議ツールをはじめとしたパソコン操作全般の質問や大学生活に関する質問も多く寄せられた。このため 2021 年度には、本サポートを生協パソコン購入者も対象とした 1 年間の有料オプションとして提供することにした。本稿では 2 年間のオンラインパソコン相談デスクの運用結果の分析とともに、複数大学を対象としたチャットサポートの利点と課題を報告する。

キーワード：パソコン相談／チャットサポート／オンラインコミュニケーション

■2-F-2

オンライン PC 講座で生まれる「つながり」—先輩、後輩、同輩の関係に注目して—

宮本 侑也

株式会社 TRYWARP

TRYWARP は、2006 年より大学生協と連携し、新生を対象としてパソコンに対する不安を解消する「パソコン講座」を展開している。その特徴は、大学の先輩スタッフが講師となり、新生にパソコンを教えるという形式をとっていることである。パソコンの上達はもちろんのこと、教える先輩と教わる後輩とのつながり、スタッフ同士のつながり、後輩同士のつながりが現れる点は特筆すべき点である。一方で、コロナウイルスの感染拡大防止のため、2020 年度からオンラインによって講座を運営することとなった。オンラインでの講座は、人の「つながり」が弱くなる点が指摘されているが、講座の運営方法の工夫により「つながり」が対面での講座と同様に生まれることがわかった。本稿では、2021 年度のパソコン講座を対象に、受講生やスタッフのアンケートから、オンラインにおいても、継続した「つながり」が見られたのはなぜなのかを検討する。

キーワード：オンライン講座／つながり

■2-F-3

大学新生向けオンラインパソコン講座におけるオンデマンド／リアルタイム形式の比較

北爪 里菜

株式会社 TRYWARP

本発表では、筆者らが所属する株式会社 TRYWARP がリアルタイム／オンデマンド双方で実施したオンラインでのパソコン講座の実践内容、学習の効果・効率・魅力を高めるための試みを報告するとともに、提供形式や方法に対して適する受講生の状況や人数、講座の内容などについて考察する。筆者らは2006年より大学新生向けPC講座を対面で提供してきたが、covid-19感染拡大防止のため対面ではほぼ実施できず、2020年はZOOM、2021年はZOOMとTeamsを用いたリアルタイム型の講座を実施した。加えて2021年は動画によるオンデマンド型講座の提供も開始した。オンデマンド型の提供では、利用者がログインして視聴するシステムによる公開、動画ごとのパスワード制御による公開など、複数の方法を利用した。

キーワード：新生向けパソコン講座／リアルタイム／オンデマンド

■2-F-4

パソコン最短学習システム「習うのコレダケ®」の開発

関 佑果

株式会社 TRYWARP

本発表では筆者らが所属する株式会社 TRYWARP が開発した、講師動画でパソコンスキルを習得できる「パソコン最短学習システム『習うのコレダケ®』」の機能や特長、利用状況、および今後の課題について報告する。筆者らは大学新生を対象に毎年約2万人にパソコン講座を対面実施しているが、その提供範囲は、筆者らがサポートできる首都圏内かつ受講見込み人数が50名程度の規模の大学に限られていた。そこで、covid-19禍に伴う昨今のオンデマンド授業の普及も鑑み、本システムを開発・提供することとした。本システムでは、10年以上に渡り大学生にパソコンの使い方を教える事業を行ってきたノウハウを活かし、最短時間でスキルが身に付くよう大学生活に必要な不可欠な最低限の学習項目に絞り込むとともに、モチベーションを保つために自分に合った講師を選べる、初心者向けのコンテンツを揃えるなどの様々な工夫を取り入れた。

キーワード：パソコン講座／動画コンテンツ／オンデマンド学習

テーマ：FD・研修（司会：森 夏節 酪農学園大学）

■2-G-1

大学生協2010年代の事業業績を辿る

仲田 秀

元 法政大学大学院

筆者は1980年から2009年までの大学生協の事業業績の分析を行い2016年に報告してきた。その方法で、その続編となる2010年からコロナ禍の前までの規模別、種別経営状況の

全般的把握を行い、分析しておく。そのことが、今後の個別大学生協の改善、改革の一助となり、大学生協事業全般の発展つながることを願っている。今、コロナ禍で奮闘する大学生協の何らかのヒントとなれば、幸いである。

キーワード：大学生協、事業業績、組合員

■2-G-2

コロナ禍における教職員研修の取組みと変化

古賀 崇朗

佐賀大学 全学教育機構

2021 年現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大が世界中で様々な影響を及ぼしている。佐賀大学でも 2020 年度の授業は対面でないと実施できない科目を除き原則的にオンライン授業となった。2021 年度は対面授業中心に戻ったが、佐賀県や隣接県および国内等の状況を踏まえ、前学期の開講早々に、一時的にオンライン授業に切り替わったりしており、予断を許さない状況である。そのような中、本学でも全学的に利用できる Web 会議システムを導入し、授業等で活用できる体制を整え、オフィス系クラウドシステムや LMS 等の既存のツールも活用しながら授業を行っている。その中で筆者らはオンライン授業の実施のため、Web 会議システムや既存のツールの授業への活用の研修を行ってきた。本稿では、2020 年度から 2021 年度のコロナ禍において実施した様々な教職員研修での取組とこれまでの変化について報告する。

キーワード：教職員研修／FD/SD／オンライン授業

■2-G-3

オンライン授業の相互見学による大学横断型 FD の可能性と課題

木村 修平

立命館大学

本発表の目的は、Zoom などのビデオ会議ツールを介して異なる大学に所属する大学教員が互いの授業を見学して相互にフィードバックを行うことにより、大学横断型の新たな FD 活動の可能性を模索することにある。2021 年度春学期に実施された本プロジェクトには、全国の大学からプロジェクトの目的を理解した複数の大学教員が参加した。教員らは見学前に Slack 上で授業の概要や目的、注目してほしい点、フィードバックを受けたい点、Zoom の接続アドレスなどを交換しあい、それぞれが都合のつく日程に他の教員の授業を見学した。本発表では、見学後のアンケートやインタビューに基づき、大学の教員が他の教員の授業を見学することでどのような示唆を受けたか、また、見学後のフィードバックを受けた教員がどのような気づきを得たのかを示す。さらに、同種のプロジェクトを全国に拡大する際の課題点を実践に基づいて検討する。

キーワード：FD／授業見学／Zoom

■2-G-4

オンラインによる社会人教育研修の可能性と限界 ～学びのDXに関する一考察～

妹尾 堅一郎

NPO 法人産学連携推進機構

昨年度のPCCでは、社会人教育の講演やセミナー、社内研修等、多くの集合研修（リアルな場における社会人の学びの場と機会）が延期・中止を余儀なくされていた。その後、ビジネス実務におけるテレワークの急速な進展・浸透が進むのに伴い、オンライン/オンメディア型の教育研修が進みつつある。特に、従来のビジネスパーソン向けの講演・講習では、オンラインセミナーが花盛りの状況である。他方、企業内研修は、座学を単にオンライン配信するだけのものから、チャットやブレイクアウト等のアプリ機能を駆使したワークショップやセッション形式を試みるものまで多様な状況である。いずれにせよ、社会人教育におけるオンライン活用の進展は間違いない。本論では、筆者が関わっている現時点までのオンライン社会人教育研修の実践経験を踏まえ、その可能性と限界を議論する。それを通じて、学びのDXに関する問題・課題を俯瞰的に考察する。

キーワード：社会人教育研修／オンライン教育／学びのDX